

【基調講演】縄文中期加曽利 E 式土器の型式編年と年代

小林謙一

1 神奈川編年から新地平編年 加曽利 E 式土器研究概要

(スライド 2) 1980 年代における神奈川シンポジウムは、その後の研究に多くの影響を与えた（小林 1983, 山本 1993, 2006）。神奈川編年においても山本暉久、鈴木保彦、戸田哲也ら参画者の間での見解の相違が『神奈川考古』に明示されていた。土器編年研究では地域によって基準が異なるのは当然であり、無理に整合性を取り共通の時期区分とすることは妥当ではない。しかし、当時は（現在においても）編年は時期区分、地域対比の上で整合的に並ぶとの前提があり、かえって混乱する場合もあった。

(スライド 3) 神奈川編年（戸田哲也ほか）につづく中部高地編年（長崎元広ほか）、東京編年（安孫子昭二ほか）、さらに埼玉事業団編年（谷井彪ほか）と土器集成・編年案が続き、加曽利 E 式土器編年研究が続く中で、山内の設定のうちの見えない部分を独自に解釈することによる加曽利 E 式土器編年が何通りか並行し、ローマ数字編年と算用数字編年が混乱を示した。神奈川シンポジウムは混乱を整理するチャンスであったが、結果的には現在の行政単位による地域編年が全盛期を迎えた。

(スライド 4-7) 神奈川編年のころの加曽利 E 式土器編年研究においても、新藤康夫（1976）による文様帯構成を基準とした編年案や、白石浩之（1978）による口縁部文様モチーフを重視した編年案などが提起された。小林は、中期前半の土器研究として、勝坂・阿玉台式土器成立期を取り上げ、文様要素・文様帯構成・文様区画の組み合わせをセリエーション的に読み取る手法を提起した（小林 1983）。中期後半においても文様要素を主な要素としつつ、文様帯構成や器形などを組み合わせて変遷をたどる黒尾和久（1995）による編年が行われ、多摩武蔵野地域の中期土器の時期設定（新地平編年）へ結実した。その中でも、型式学的変遷観を重視する小林・黒尾の立場と、厳密に検討した上での一括出土など層位的関係を組み合わせるべきとの立場である中山真治との間に見解の相違もあった。型式学的研究と住居一括出土資料という層位的フンドを主たる方法とする点で土器型式編年と同一の方向性を持ちつつ、中期土器の時間的スケールとしての整理を主目的に対象地域をしぼって中期を 13 期 31 細別に区分したのが「新地平編年」であり、機械的に時期設定することで縄文中期集落の時間軸の整備を目標とした（小林 2019b）。

(スライド 8) 早稲田大学会津八一記念博物館の山内清男資料展示図録（2021）に、時期順に数字で示す編年が示される。山内清男の著作中にも細別を尽くした上で大別に至るのがよいという趣旨で記される。

2 土器編年時期設定上の問題点 関東地方中期後半を中心に

(スライド 9) 旧稿（2019b）において、新地平編年における時期区分上の論点をあげた。

(スライド 10-14) ⑤ 9c 期と 10a 期（9c 期の有無）→土器型式・時期設定をどう規定するか・型式と層位の関係（9c 期問題） 北関東との関係、武蔵野台地北東部からの視点、加曽利 E 式・曾利式の成立と勝坂・阿玉台式の終末のあり方。新地平編年の当初（黒尾ほか 1995）より、勝坂式終末期と武蔵野台地型加曽利 E 初現期の土器の併存時期の設定から 9c 期が仮設されつつ、特に武蔵野台地型加曽利 E 初現期の土器の存在をもって 9c 期を加曽利 E 式期に含めるか勝坂終末期と捉えるかにおいて意見の差異があった。

(スライド 15-19) ⑥ 11b 期の細別。連弧文土器の成立、曾利Ⅱ・Ⅲ式の細別→加曽利 E 式中葉のあり方、連弧文土器・曾利系土器との関係は、加曽利 E 式土器の型式変化よりも細かい時期区分となる場合もある。

⑦ 12 期 連弧文土器の終末→東西関東加曽利E式土器群の関係。12c 期の位置づけについては、東関東との並行関係などについて十分に整理されていない部分が残る（大内 2008）。

（スライド 20）⑧ 13b 期と 14a 期 中期と後期の境をどこに置くか。中期末後期初頭の境、梶山タイプ、曾利式の終焉、中期と後期の編年上の画期基準について課題が残る（小林 2015a）。称名寺 1a 式期（新地平 14a 期）に併存する加曽利 EV 式と、中期末の加曽利 E4 式（13b 期）の型式学的な弁別が不明瞭（小澤 2016 など）。その後の加曽利E式系土器の細別とどこまでを加曽利E式とするのか、といった問題点がある。その上で、中期と後期の境の年代を求め、列島規模でのホライズンにおける中期・後期の画期を定める必要がある。

3 実年代比定の問題 縄文中期細別時期ごとの実年代比定

（スライド 21）炭素 14 年代測定による高精度年代体系は、土器付着物・住居出土炭化材による。基本的には、同一の基準で採取から AAA 処理、AMS 測定を行っている国立歴史民俗博物館年代測定研究グループおよび小林が関わった測定データを中心とし、炭素 14 同位体比の検討で海洋リザーバー効果の影響が認められないと捉え得るデータを用いて高精度年代体系を組み立てる。

（スライド 22）火災住居の構築材など近い時期に帰属すると思われる複数試料測定例として、東京都狛江市弁財天池遺跡 4 住など、ウイグルマッチングを行った例として長野県茅野市長峯遺跡 118 住、千葉県成田市水神作遺跡（第 5 次）14 住などがある。実年代が絞り込める時間上の定点を増やしていく。

（スライド 23-27）細かな編年単位ごとの実年代比定の材料とし実年代体系化を仮設する。型式編年の相対順序を用い、較正年代から推定するが、10 年以下の目盛りにはならず、測定誤差がある。あくまで仮説的な推定年代だが、関東・中部地方では測定蓄積があり、細別時期ごと・四半世紀程度は固まりつつある。

（スライド 28-30）型式変化の時間的推移について、いくつかの考え方があり、それによって実時間の推移に用いるモデルが異なり、統計的な計算による年代幅も異なる。小林 2017 では、基本的に土器型式はある時点をもって交代していくと仮定した（モデル A）。エンリコと共同研究した際（Enrico・Kobayasi 2020）ではある程度新旧の型式がダブリながら変遷すると仮定（モデル B）した。ベイズ統計の手法を用いて、縄文中期についての新地平編年ごとの実年代推定について再検討を試みているが、そこではタイプの変遷がセリエーションのように盛衰を持って変わっていくと仮定（モデル C）して計算している（kanasaki, Omori, kobayashi 予定稿）。それぞれのモデルによって、ある程度年代幅が異なってくる。

（スライド 31-33）編年単位としてきた遺構一括出土例も、物質のライフサイクル、製作－使用－廃棄の差異により、多様な時間性を有す。例えば、現在の我々が所持する財布・貯金箱の中の硬貨の年代組成をみよ。自宅にある貯金箱も身に所持する硬貨も、発行年をみると調査時の年を示す硬貨はほぼない。

（スライド 34-36）土器型式の時間的偏差に関して、製作・使用・廃棄の時間差の問題（鈴木 1969）や、型式的变化と実際に作られる時間とのマッチングの問題など様々な検討すべき点がある。年代測定研究と、型式学的研究や層位学など調査手法の進展と組み合わせて、遺跡形成過程の復元から文化変化の過程に至るまで、基軸となる時間軸を解明し文化復元を目指す。

（スライド 37）土器型式には時間的単位として以外の属性（系統性や地域差など）も含まれるが、時間的位置づけの指標としての重要性は現在も変わらない。新地平編年による、地域を限定した上での数字による細別区分は有効性を持ち、考古学的な歴史復元の有効な方法論の典型例と評価し得る。

（参考文献については、予稿集を参照されたい。なお、本稿では「縄文」で統一した。）

縄文中期加曽利E式土器の 型式編年と年代



- ①編年研究の流れと
加曽利E式土器編年概略
- ②時期設定における問題点
- ③実年代比定とその問題点
- ④土器型式と時間の問題

小林謙一
2024/11/23

Photo: 三鷹市滝坂遺跡SI-50出土土器



1 神奈川編年からの加曽利E式土器研究概要

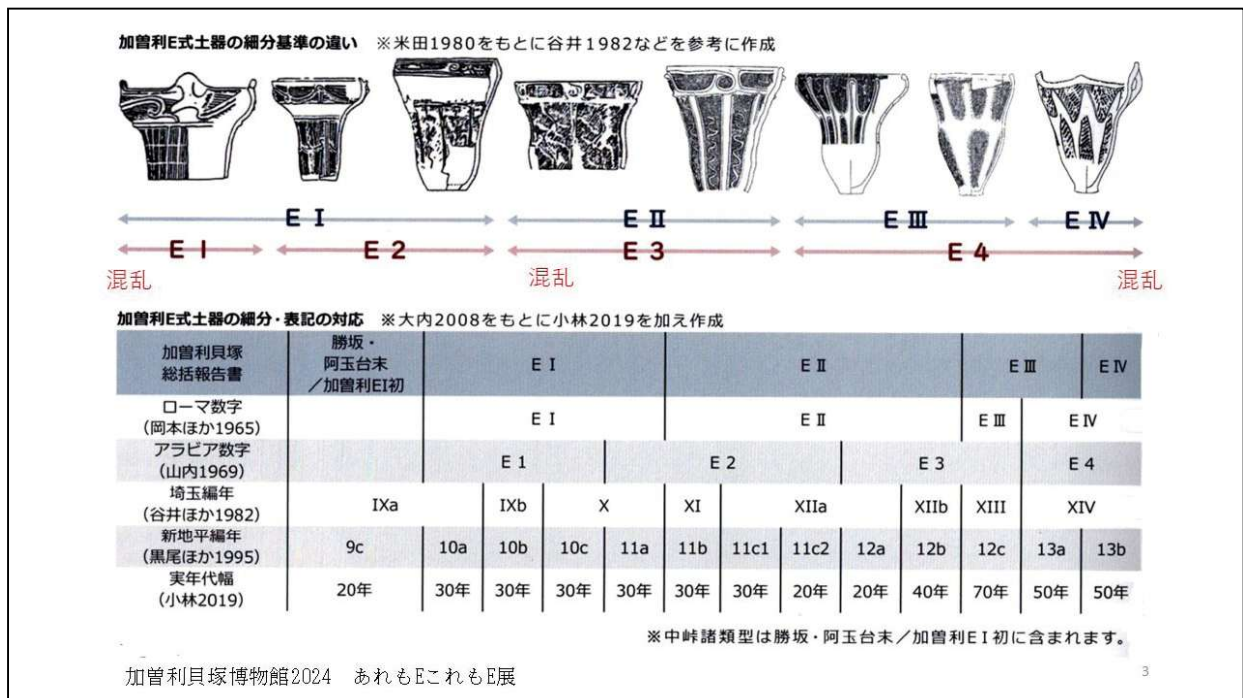
1980年前後においては、**神奈川シンポジウム**は百花繚乱というべき編年研究の混乱状態の中での灯台のようなものであり、その後の研究に多くの影響を与えた(小林1983,山本1993,2006)。

神奈川編年の研究は、山本輝久、鈴木保彦、戸田哲也ら参画者の間での見解の相違が『神奈川考古』に明示され、今日的に見ても高く評価される。土器編年研究・集落理解は、研究者の立場や主として立つところの地域によって異なるのは当然であり、無理に整合性を取り共通の時期区分とすることは間違っている。しかし、当時は(現在においても)編年は時期区分としても地域対比の上でも整合的に並ばなくてはならないとの前提があったため、かえって混乱する場合もあったといえる。

神奈川編年(戸田哲也ほか)につづく**中部高地編年**(長崎元広ほか)、**東京埼玉編年**(安孫子昭二ほか)、さらに**埼玉事業団編年**(谷井彪ほか)と土器集成・編年案が続き、加曽利E式土器編年研究が進んだが、

ローマ数字編年と算用数字編年が混乱を示した。神奈川シンポジウムは混乱を整理するチャンスであったが、結果的には現在につづく行政単位による**地域編年**が全盛期を迎えた。→必要悪だったが混乱を残した

また、新藤康夫(1976)による文様帯構成を基準とした編年案や、白石浩之(1978)による口縁部文様モチーフを重視した編年案などが提起された。その後も、多くの中期後半の編年研究が提示されたが、編年研究の基本としては山内編年の(時間的・空間的単位としての)土器型式設定の枠組みの中で細別を図るものであった。



多摩武蔵野地域縄文中期時期設定（新地平編年）へ

多様化する編年において、筆者は、中期前半の土器研究として、勝坂・阿玉台式土器成立期を取り上げ、**文様要素・文様帯構成・文様区画の組み合わせをセリエーション的に読み取る手法**を提起した(小林1983)。**→早川天神森遺跡での分析**

中期後半において文様要素を主要要素としつつ、文様帯構成や器形などを組み合わせて変遷をたどる黒尾和久(1995)による編年が行われ、多摩武蔵野地域の中期土器の**時期設定(新地平編年)**へ結実した。

ただ、その中でも、型式学的変遷観を重視する小林・黒尾の立場と、厳密に検討した上での一括出土など層位的関係を組み合わせるべきとの立場の中山真治との間に見解の相違もあり、型式学的研究と住居一括出土資料という層位的フンドを主たる方法とする点で土器型式編年と同一の方向性を持ちつつ、中期土器の時間的スケールとしての整理を主目的とし対象地域をしぼって、中期を**13期31細別に区分したのがいわゆる「新地平編年」**であり、機械的に時期設定することで縄文中期集落の時間軸を整備しようとしたものである。＝土器の時期区分としても有効→系統型式の区分と時期設定を分ける

1995.12 黒尾和久・小林謙一・中山真治「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』…新地平編年
2004.7 小林謙一・中山真治・黒尾和久「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定(補)」『シンポジウム縄文集落研究の新地平3—勝坂から曾利へ—』
2005.12 セツルメント研究会『縄文研究の新地平—勝坂から曾利へ—』考古学リター—6. 六一書房
2008.5 津木台地区考古学研究会「シンポジウム『縄文中期集落研究の新地平』記録集」『論集津木台2』
2016.3 縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会「シンポジウム『縄文研究の地平2016—新地平編年の再構築—』」
2) 1978.4 神奈川考古学会「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案」『神奈川考古』4
1979.12 中部高地縄文土器集成グループ「中部高地縄文土器集成第1集 縄文中期後半の部」
1980.12 神奈川考古学会「縄文時代中期後半の諸問題」『神奈川考古』10・神奈川シンポジウム
1981.4 神奈川考古学会「シンポジウム『縄文時代中期後半の諸問題』」『神奈川考古』11
1982.12 谷井彪・細田勝「縄文中期土器群の再編」『研究紀要1982』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

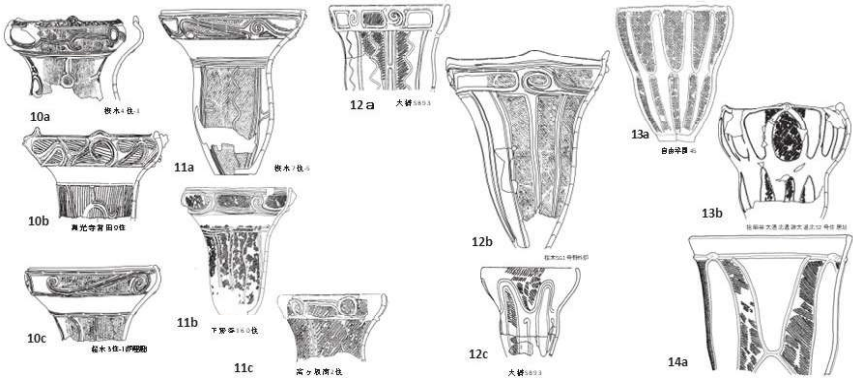
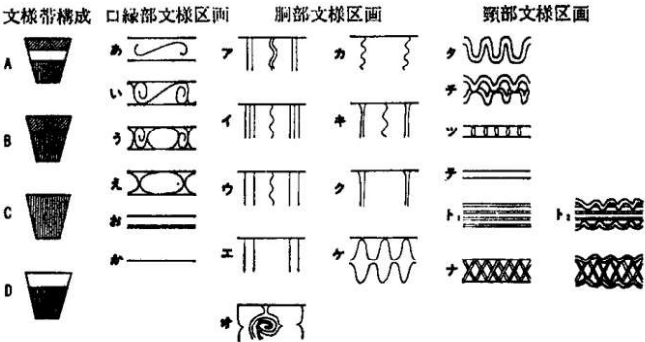
小林謙一1983
「出土土器の分類」
『早川天神森遺跡』
神奈川県埋蔵文化財センター

口縁部文様区画(縦列)と胴部文様区画(横列)

加曾利E	ア	オ	イ	ウ	エ	ケ
あ		2	2			
い			3			
う				2	11	1
え					8	1
お				1	2	10
か						

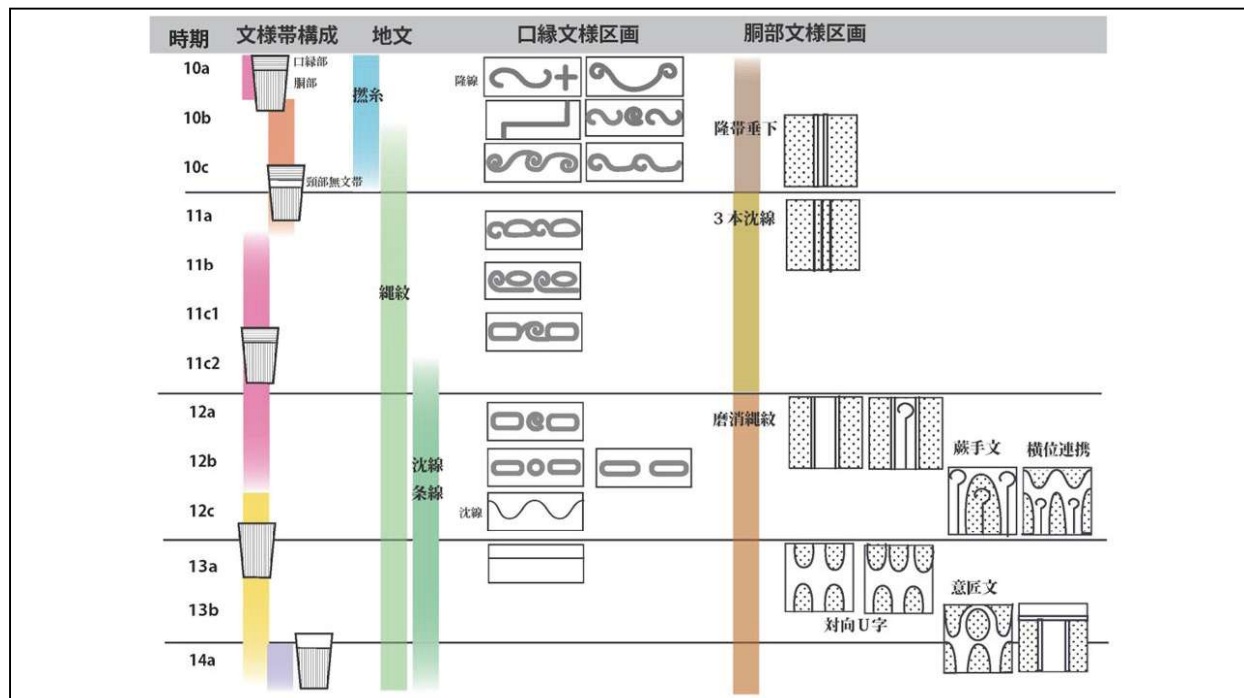
文様帯構成(縦列)と胴部文様区画(横列)

文様帯構成(縦列)	ア	オ	イ	ウ	エ	ケ	文様帯構成(縦列)と口縁部文様区画(横列)	あ	い	う	え	お	か
A		2	2				A	5					
B			4	2	10		B		3	12			
C				1	11	11	C				9	14	



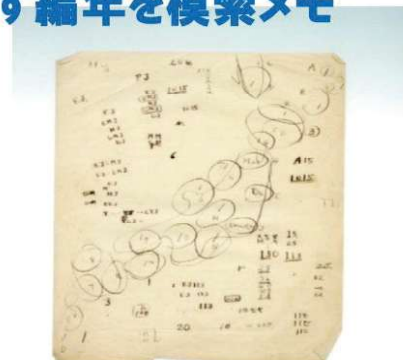
加曾利埋蔵 総括報告書	図版・阿玉倉本 加曾利E-類編	E I				E II				E III		E IV			
ローマ数字 阿玉倉本 1963 (など)		E I				E II				E III		E IV		E V (石倉 1992)	
アラビア数字 (山内 1969)		E1				E2				E3		E4			
神奈川編年 (阿玉倉本 1980)		I	II a	II b	II c	III				IV					
東京・埼玉編年 群蔵子白か 1980)		I	II	III	IV				V		VI		VII		
埼玉編年 (石倉本 1982)		IXa	IXb	X		XI	XIIa		XIIb	X III	X IV				
新地平編年 (島原本 1995)		9c	10a	10b	10c	11a	11b	11c1	11c2	12a	12b	12c	13a	13b	14a

令和6年度企画展「あれもEこれもE 加曾利E式土器」加曾利貝塚博物館 2024 改変



山内清男の時期順に数字で示す編年を模索メモ

早稲田大学会津八一記念博物館の山内清男資料展示図録によると、**時期順に数字で示す編年**を模索していた。そのことは、山内清男の著作の中にも細別を尽くした上で大別に至るのがよいという趣旨で記されている。土器型式には時間的単位として以外の属性(系統性や地域差など)も含まれており、さらに属性分析によって多様な位置づけがはかられていくと考えるが、時間的位置づけの指標としての重要性は現在も変わらない。



65. 10連法による細別型式分類メモ
時期不詳 214mm×270mm

* 10連法により細別型式を表現しようとしている。EJ(早期)・EJA(前期)・EJB(中期)・EJC(後期)・EJD(晩期)をそれぞれ1～5にそれぞれ対照させている。(要領書一冊)

新地平編年は、地域を限定した上での数字による細別区分は有効性を持つ。

関根有一朗2021

また、山内清男は反対の立場であったが、炭素14年代(年輪年代や酸素同位体比も含め)の自然科学的年代測定法は、その重要性を増す。型式学や層位をはじめとした調査手法の進展と組み合わせて、遺跡形成過程の復元から文化過程に至るまで、新たな編年基軸の一つであると捉えられる。

2 土器編年時期設定上の問題点 関東地方中期後半を中心に 新地平編年における時期区分上の論点

- ① 1期 前期と中期の編年上の画期基準。
- ② 1-4期 五領ヶ台式の細分。
- ③ 4b期と5a期 五領ヶ台と勝坂の境
大石式・竹ノ下式・神谷原式・法正尻タイプなど、阿玉台Ia式の位置づけ。
- ④ 7-8期 藤内式の細別、阿玉台III・IV式の関係。
- ⑤ 9c期と10a期(9c期の有無)
- ⑥ 11b期の細別 連弧文土器の成立、曾利II・III式の細別。
- ⑦ 12期 連弧文土器の終末、12c期の位置づけについては、東関東との並行関係。
- ⑧ 13b期と14a期

上記のうち、中期後半に関わる論点として、⑤～⑧の点を捉え直したい。

神奈川県域

9b期

9c期

10a期

縄文集落の地平2017 小林

⑤→土器型式・時期設定をどう規定するか 型式と層位の関係(9c期問題)

9c期と10a期 (9c期の有無)

円筒型
南関東勝坂系(中山)

←加曽利E祖型
につながる口縁部
文様帯(関東)系

「大木」式系(中山)

武蔵野台地型加曽利E

北関東との関係、武蔵野台地北東部からの視点、加曽利E式・曾利式の成立と勝坂・阿玉台式の終末

新地平編年当初より、勝坂式終末期と武蔵野台地型加曽利E初現期の土器の併存時期の設定から9c期が仮設されつつ、特に武蔵野台地型加曽利E初現期の土器の存在をもって9c期を加曽利E式期に含めるか勝坂終末期と捉えるかにおいて意見の差異

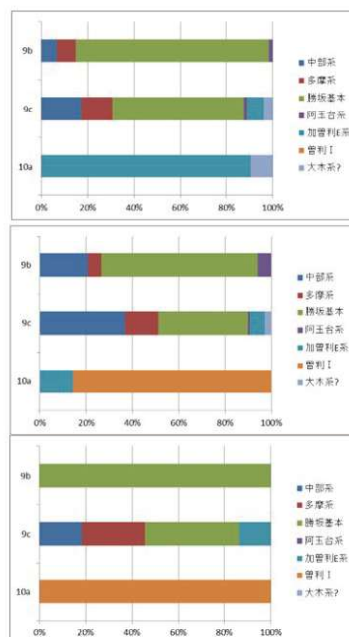


地域別の土器群のあり方

鶴見川流域
勝坂主体から加曾利Eへ転換

相模原台地
中部系勝坂を混在させ、
曾利系へ

相模川上流
勝坂系に中部系勝坂等が
急激に混在し曾利主体へ

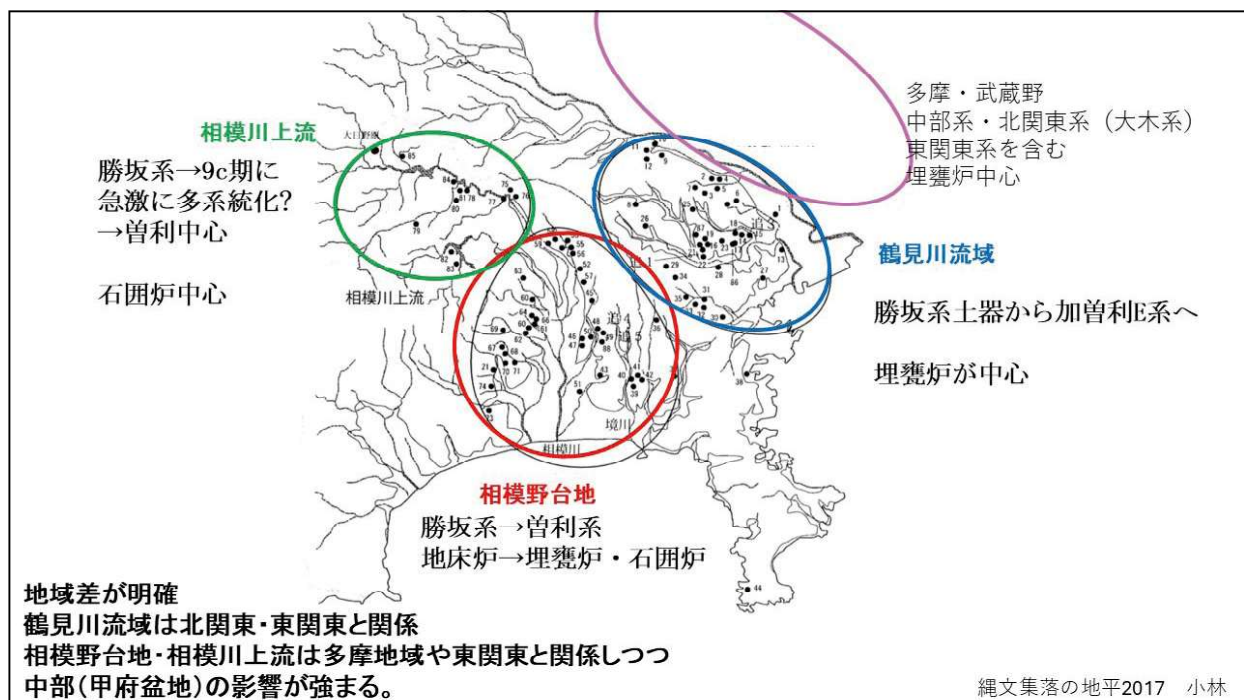
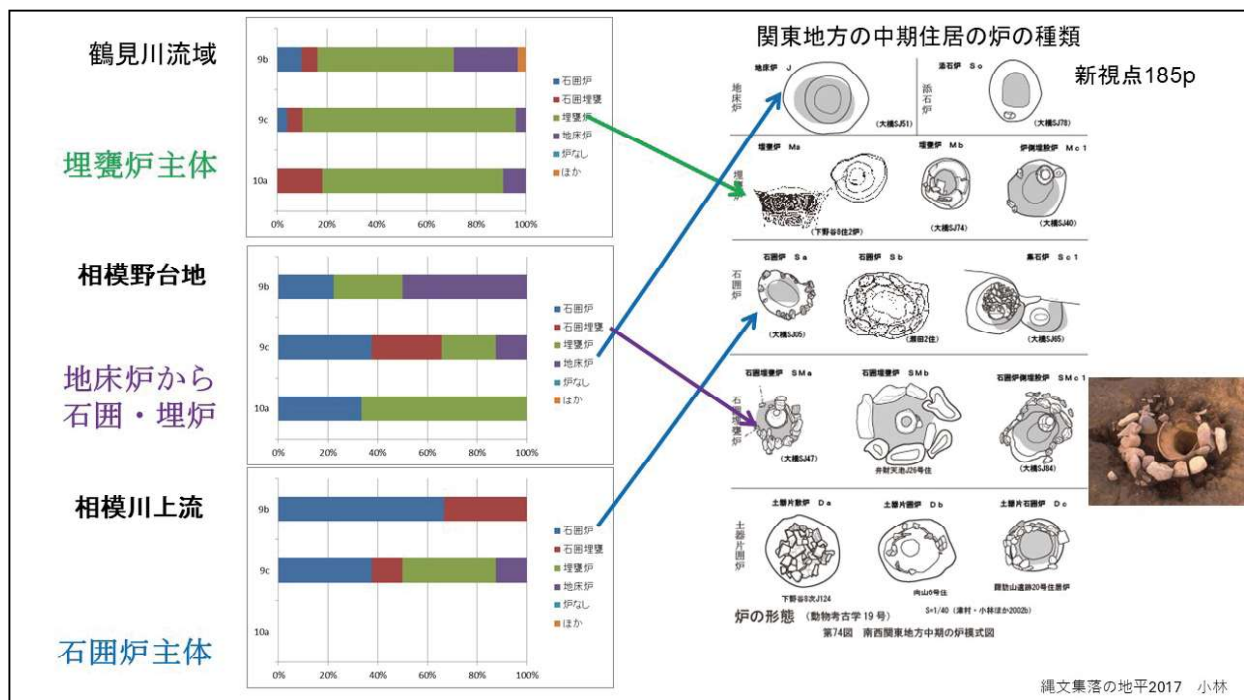


鶴見川流域	石調記	石調記	石調記	地床記	史記	深か	計
9b	2	2	4	1			11
9c	3	2	17	8		1	31
計	5	7	21	9		1	43

相模原台地	石調記	石調記	石調記	地床記	史記	深か	計
9b	1	2					3
9c	12	9	7	4			32
10a	4	1	5	9			19
計	17	12	12	13			53

相模川上流	石調記	石調記	石調記	地床記	史記	深か	計
9b	3	1	2	1			7
9c	2	1	3	1			7
10a	5	2	3	1			11
計	10	4	8	3			25

図9 地域別の土器群



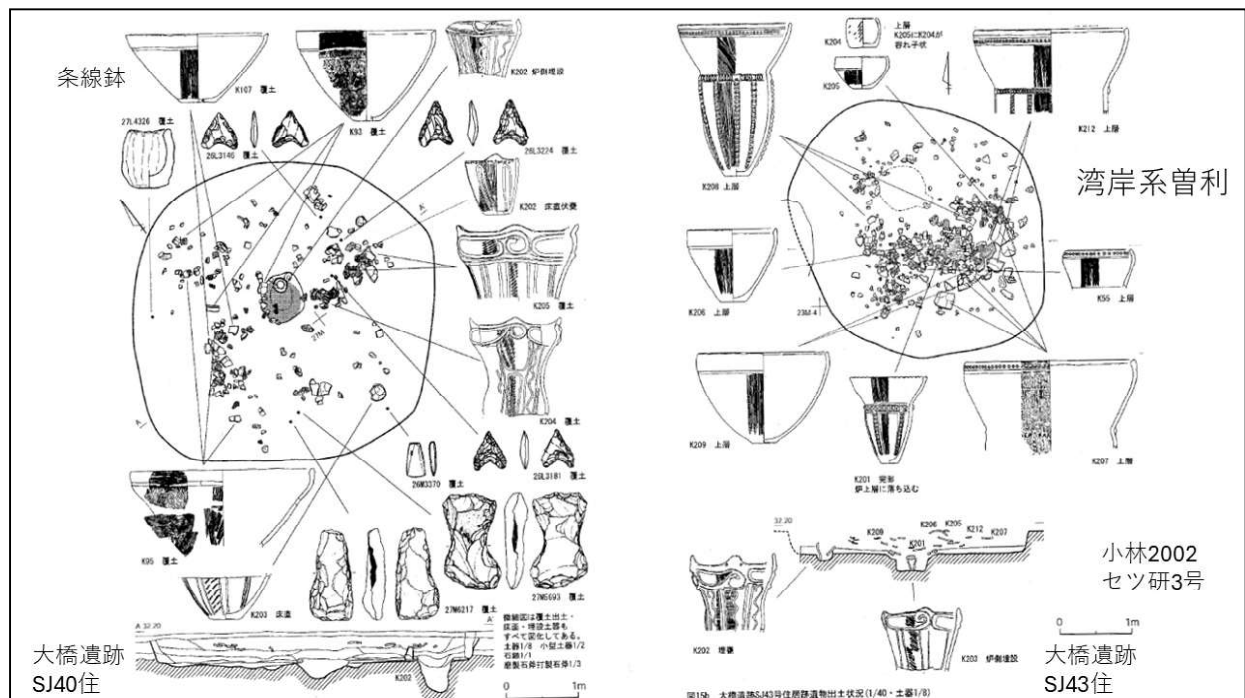
⑥11b期の細別 連弧文土器の成立、曾利II・III式の細別

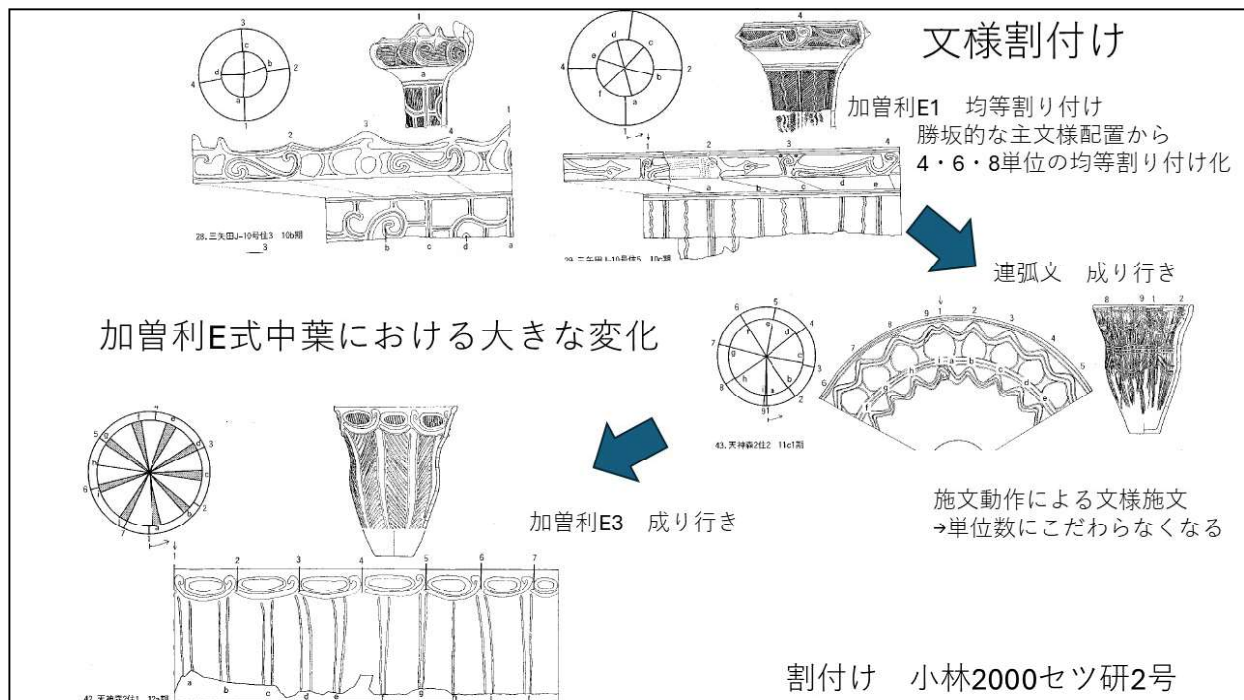
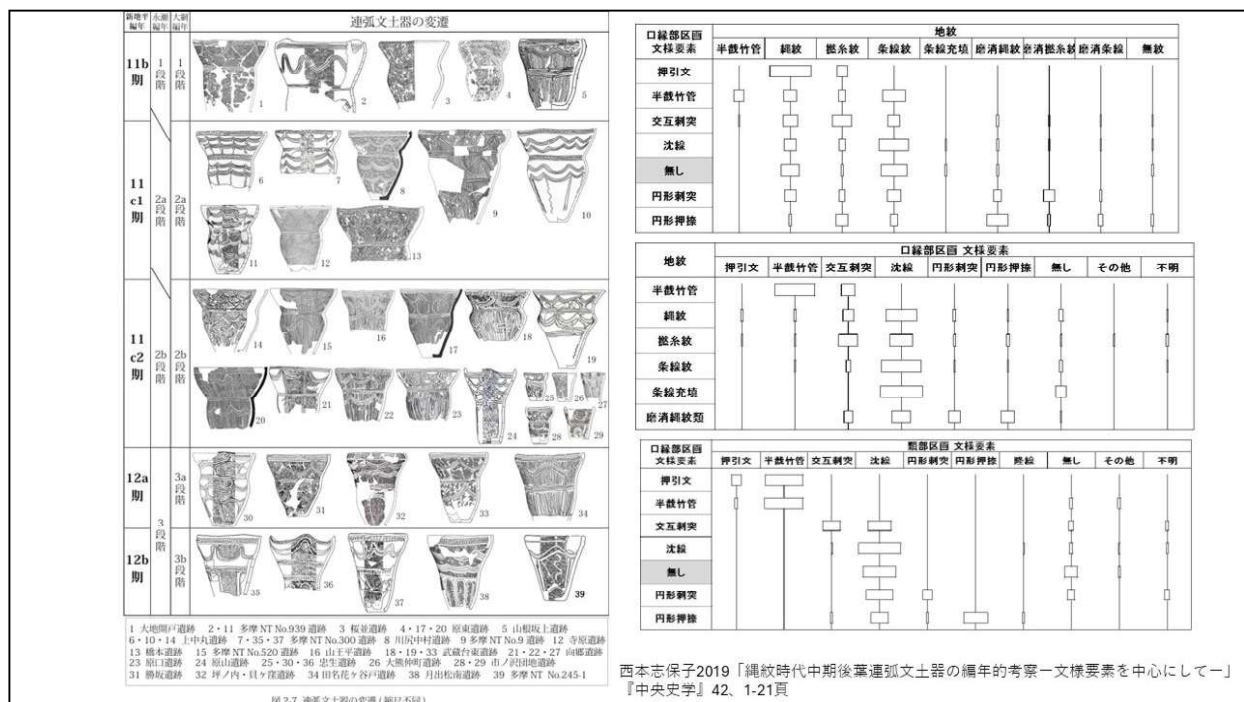
加曽利E式中葉のあり方、連弧文土器・曾利系土器との関係

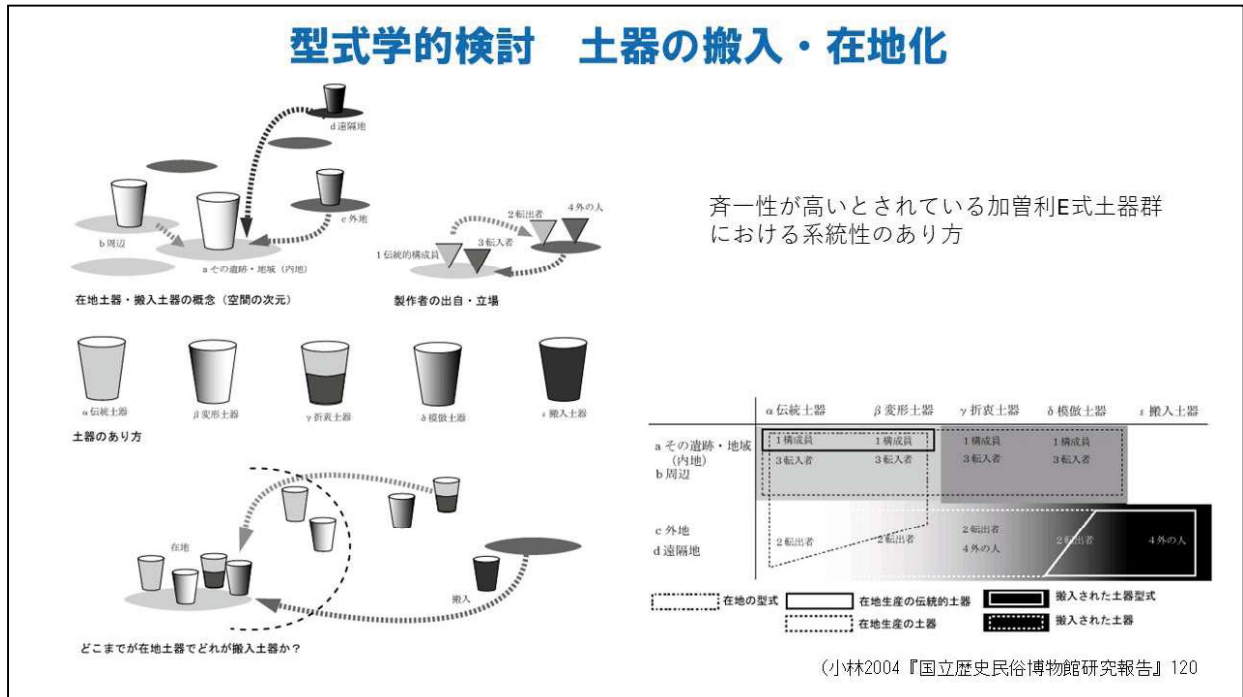
前原遺跡報告書(黒尾2010)の考察で、黒尾は連弧文の有無によって11b期を1・2期の前後に分けている。しかしながら加曽利E式土器自体の変化は明らかでなく、連弧文のあり方によって変化が示される11c1・2期の区分と同じく、土器型式学的な細別に課題が残る。同時に、連弧文土器が型式として設定されるかどうか、その系譜、連弧文の初現を11a期とするか11b期とするか、またその終末を12b期とみるかどうかについて議論が分かれている(大網2016など)。

⑦12期 連弧文土器の終末 東西関東加曽利E式土器群の関係

12c期の位置づけについては、東関東との並行関係などについて十分に整理されていない部分が残る(大内2008)。







3 実年代比定の問題 細別時期ごとの実年代比定

炭素14年代測定は、ほとんどを土器付着物・住居出土炭化材によっている。IntCal20校正年代データセットとベイズ統計を用いた計算プログラムOxCal4.4を用いて計算する。

縄文中期に関しては関東・中部地方の150点以上のデータを用いて実年代推定を行ってきた。

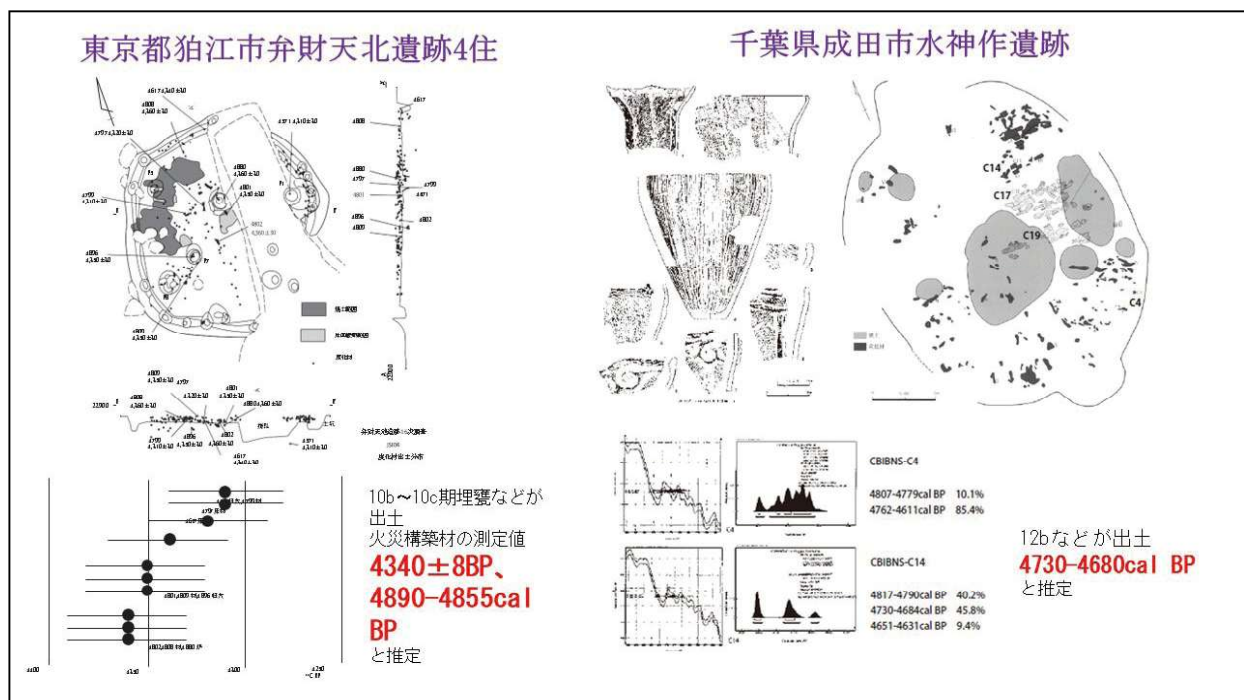
それらの年代付けでは一定の確率分布に伴う推定となり、ピンポイントの年代は比定できない。データセットが10年ごとであるため、基本的に単年度での年代比定は縄文時代中期に対しては現時点では不可能である。ただし、炭素14年代測定でも、複数年輪による樹幹試料によるウイグルマッチングなど高精度年代決定との対比が可能な場合がある。

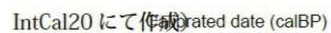
火災住居の構築材など近い時期に帰属する試料について年代測定

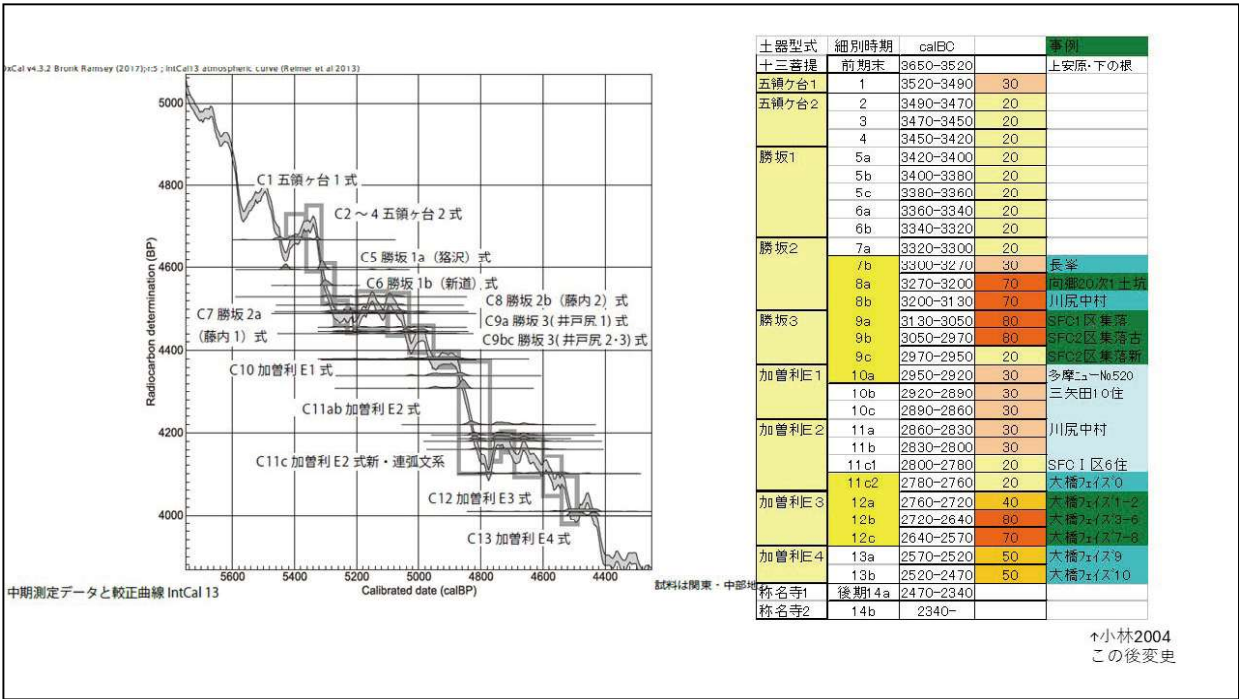
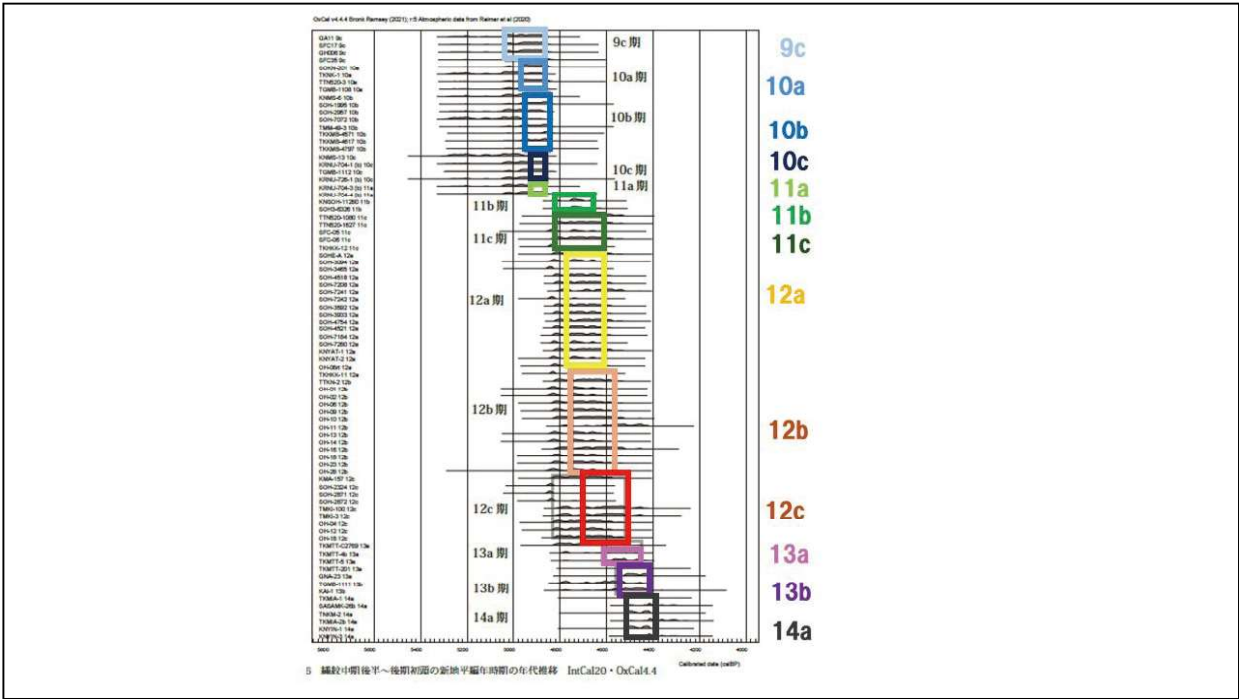
東京都狛江市弁財天北遺跡4住、山梨県北杜市南沢遺跡、
北杜市梅の木遺跡18住

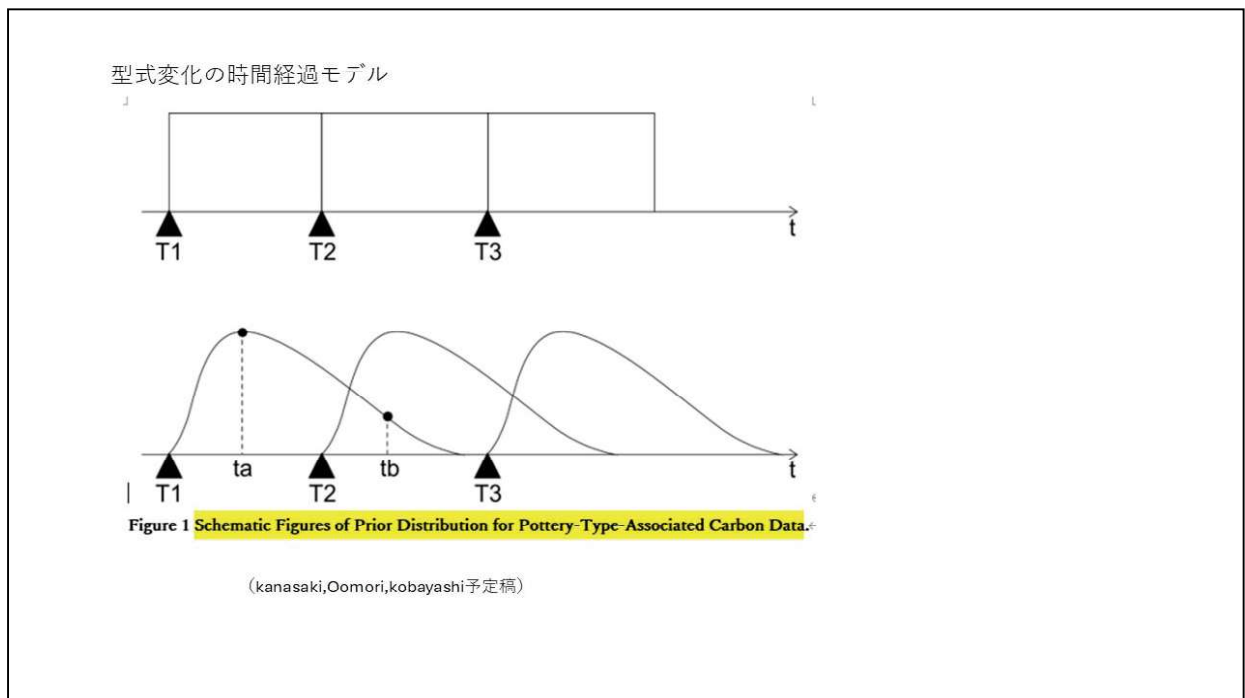
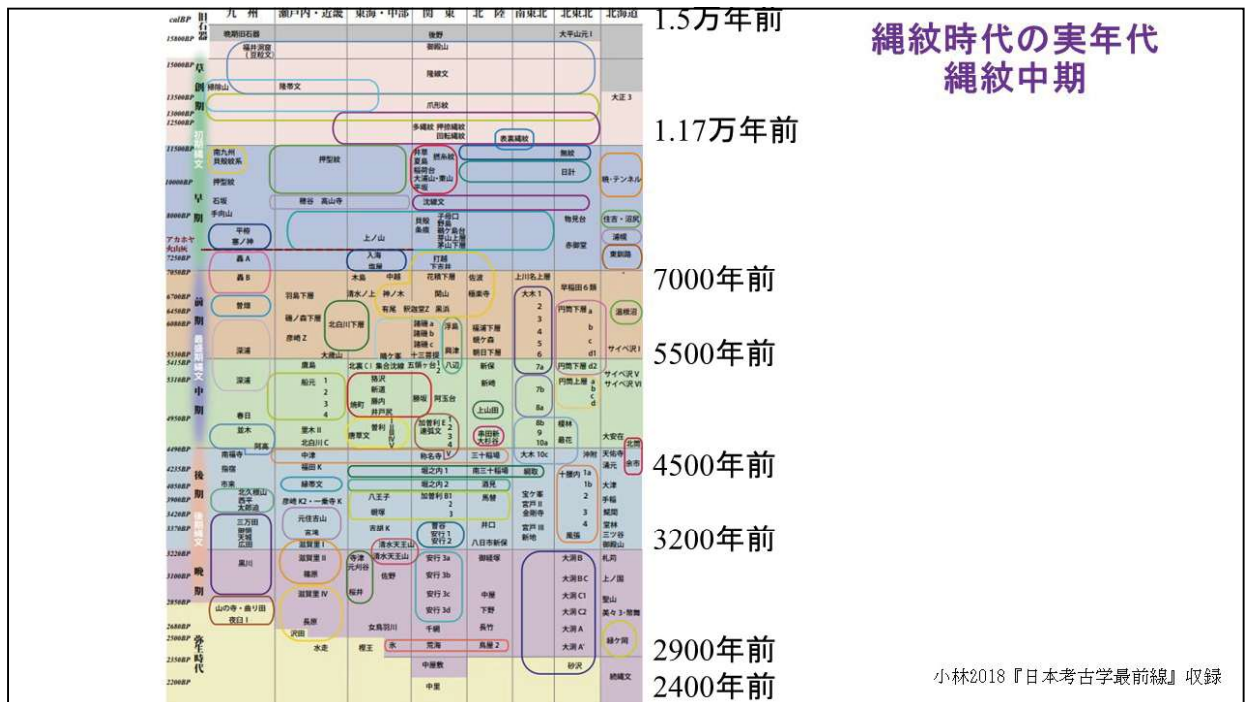
ウイグルマッチングを行った例

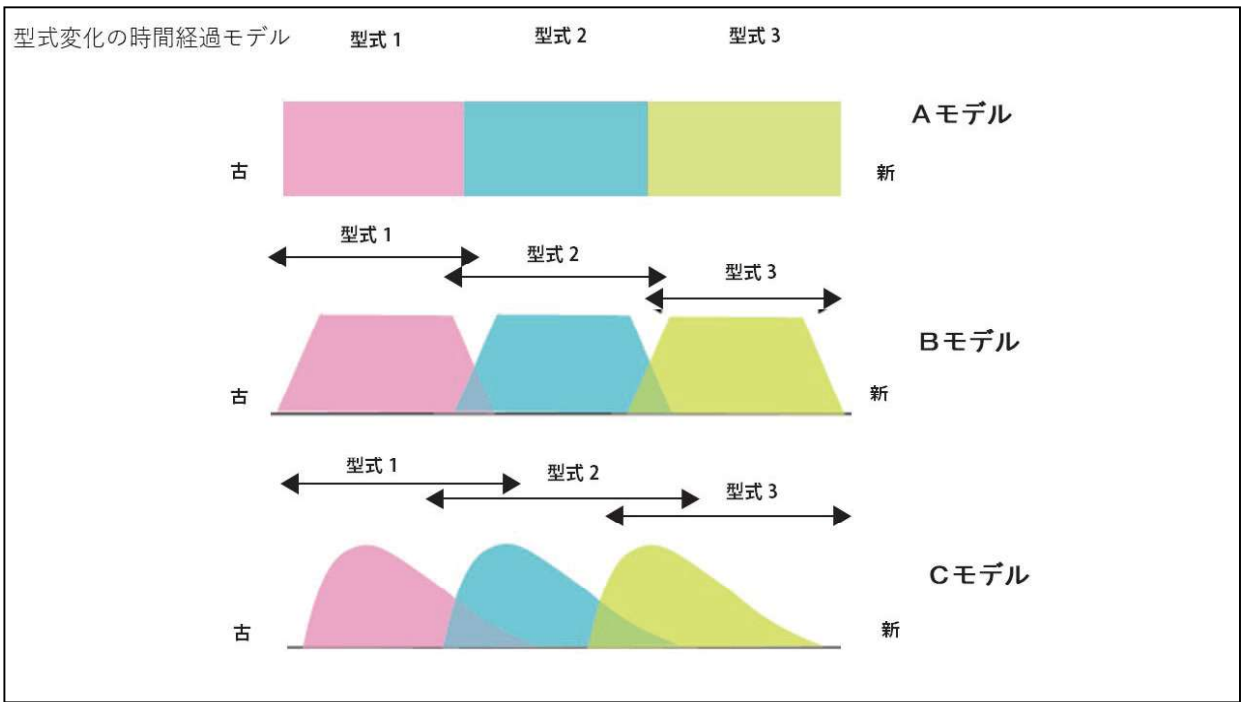
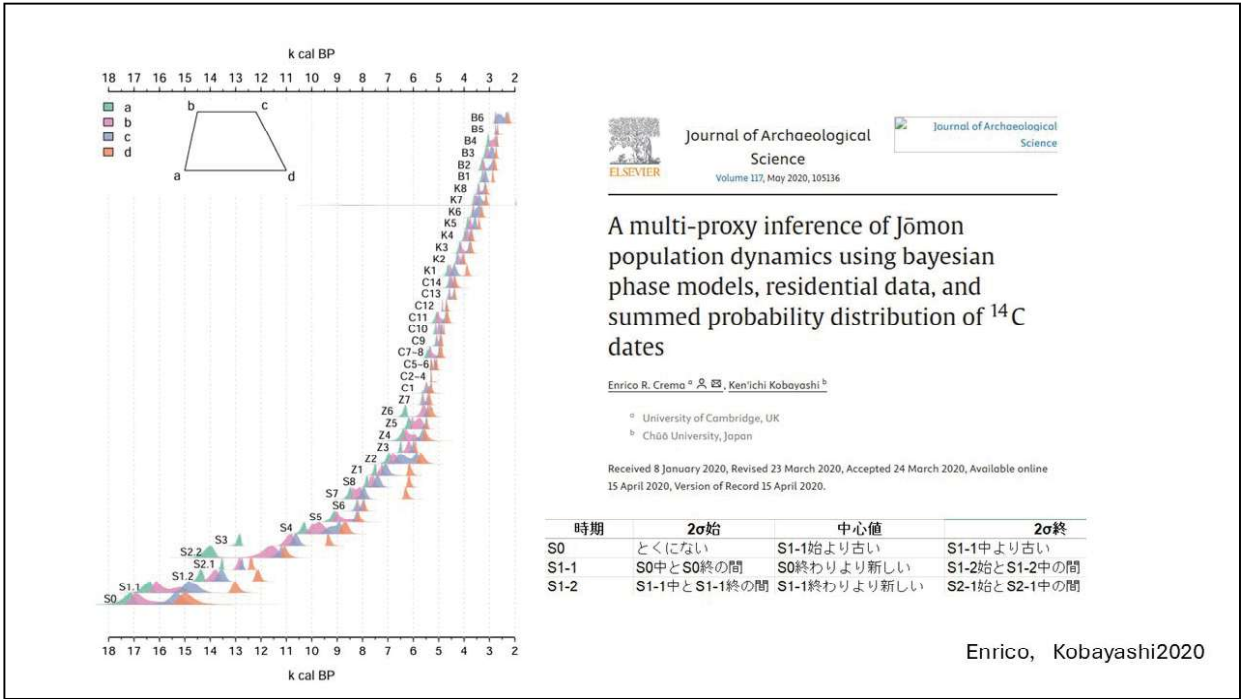
長野県茅野市長峰遺跡118住、千葉県成田市水神作遺跡(第5次) 14住











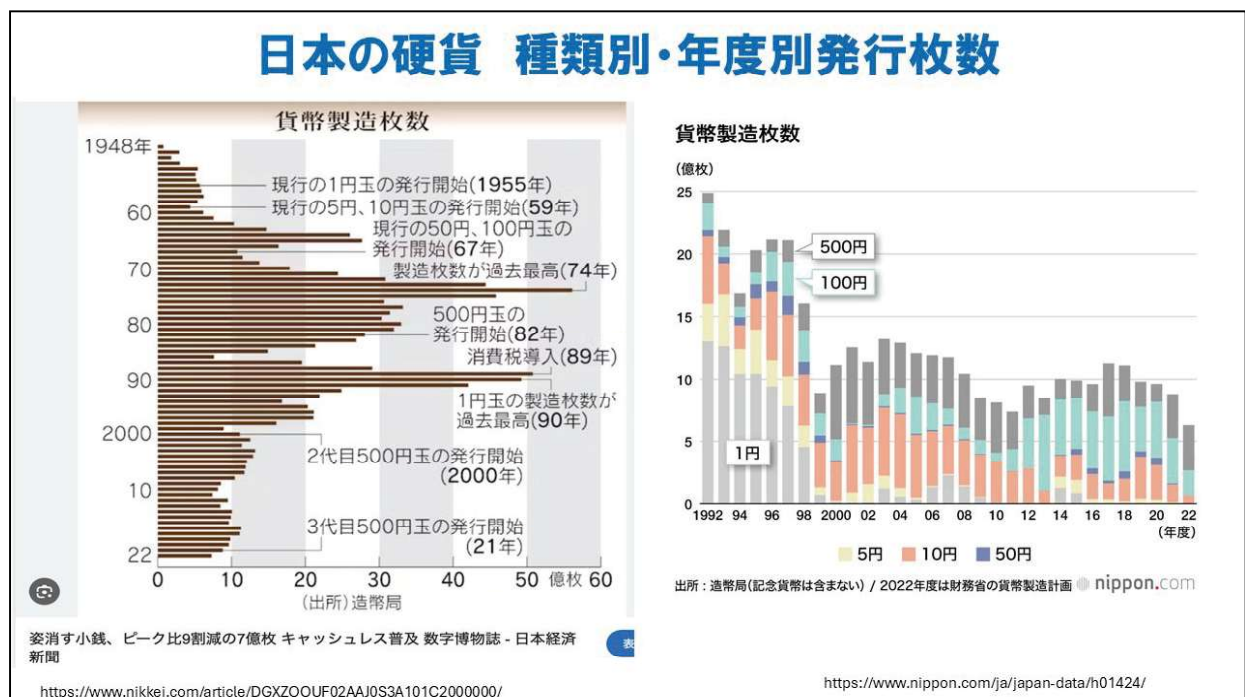


表4 2010年度調査例における最新年代の年代別出現数											昭和54年 昭和53年 昭和52年 昭和51年 昭和49年 昭和48年 昭和45年										
財布25例		平成22年	平成21年	平成20年	平成19年	平成18年	平成17年	平成16年	平成15年	平成14年								平成13年	平成12年	平成11年	平成10年
500円			5	4	1	1	1	1	2												
100円			1		3	4	4	1		2											
50円						1	1	1													
10円			2	4	2	3	1	1		1											
5円						1	1														
1円		1		2	1	1		1													
全種		1	7	8	1	4	1	1	1												
貯金箱21例																					
500円		2	5			1	1	1													
100円		1	1	2	3		3														
50円		2								2											
10円		2	4	4	3	2															
5円				1	1			1													
1円		1			7	1													1		
全種		5	7	2	4	1				1									1		
		0	1	2	3	4	5	6	7	8											
略																					

組成の中の一番新しい年代はいつか？

→最大36年前のコインが含まれる。
最新の年代が含まれるのは財布で4%、貯金箱で24%、1年前で財布28%以下、貯金箱で33%以下

考古時間論

—縄紋住居跡応用編—

五十嵐 彰

1. 遺構編年の原則

縄紋集落研究において考古資料の形成時間、特に遺構編年に関する方法論的探求が、解決すべき課題となっている（泉 2006、黒尾 2001、小林 2004・2006、谷口 2005：14 頁など）。見方を変えれば考古資料相互の時間関係の検討は、考古時間論の先駆的な問題提起（鈴木公 1969）以来、依然として縄紋集落が中心的検討対象として位置づけられているということである。

「遺構から出土した土器型式にもとづいて遺跡の時期をいくつかに大別し、さらに遺構の新旧・前後の関係にもとづいて細別する。このような手法が一般におこなわれている。このようなその結論をうけいれても、実際上の問題が起きることはほとんどない。しかしつきつめて考えると、この手法には問題がないわけではない。ここでは、土器型式・遺構の位置関係を、ともに時間の尺度として利用しており、前者は刻みが粗く、後者は刻みが細かいということになる。施設（とくに住居）の耐久期間は、土器型式の継続期間よりは短いという推測が前提となっている。この推測はおそらく正しいだろうが、証明されたわけではない。ここで立ち入った説明はできないが、前回は指摘したように、土器と施設の耐久期間はなじみ要因に支配されているとは考えられないし、土器型式の交代と施設の廃棄サイクルが同調していることが確認されているわけでもない。遺構の位置にもとづく新旧の序列・遺物と遺構の型式にもとづく年代、この二組のデータを対照する。それが遺構の編年の原則である。」（林 1995b：99 頁）

ここでは、考古時間論の本質的な問題、すなわち遺物「もの」と遺構「あな」、型式と層位の時間認識の違いが述べられている。本稿は先に紹介した

考古時間論

「terminus post quem」<TPQ>および「terminus ante quem」<TAQ>という考古時間の二つの原則（五十嵐 2006）に基づいて、土器型式と遺構の位置関係が示す時間性の相互関係について、もう少し「つきつめて考え」、さらにはやや「立ち入った説明」をも試みたい。どのような「問題がないわけではない」すなわち「ある」のか、「遺構の編年の原則」を今一度確認しよう。

「住居跡から見つかる土器は、1 住居内の施設（火竈・炉・埋蔵など）に利用されているもの、2 床面から出土し、屋内に遺棄・放置されたものと判断できるもの、3 住居跡の埋土から出土し、廃棄後の投げこみ・流れこみと判断できるものに大別できる。住居の付帯施設に利用している土器は、住居の建造年代の上限、つまりそれよりはさかのぼらぬ年代をしめたことになる。床面直上から出土し、遺棄・放置されたと推定できる土器は住居廃絶の年代の上限を、埋土から出土する土器はおなじく下限をしめことになる。したがって、住居が利用されていた期間をしめす直接的な証拠というものはない。われわれは 1・2 あるいは 1・3 の組み合わせから、住居が生きていた期間を推測しなければならないわけである。」（林 1995a：91 頁）

以上の「1」を「炉体土器」、「2」を「床面上土器」、「3」を「覆土中土器」とし、住居の製作（M）・使用（U）・廃棄（D）に応じて考え直してみよう。すなわち「炉体土器（1）」は、住居製作（M）の開始（始点）を、床面上土器（2）は住居の使用と廃棄の境界（U-D）を、覆土中土器（3）は廃棄（D）の終了（終点）を示す」と言い換えることができよう（第1図）。

土器時間 ⇒

住居時間 ⇒

1

2

3

M

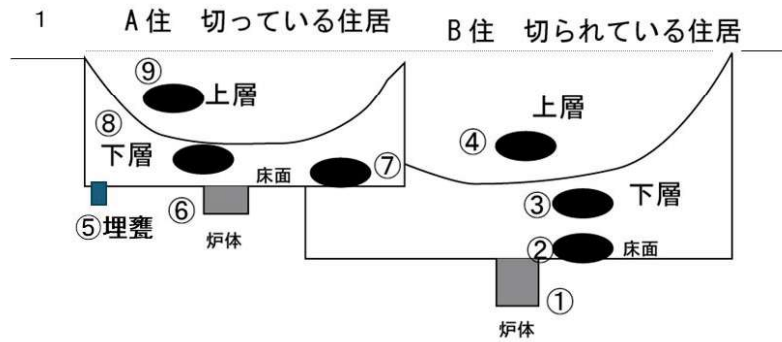
U

D

第1図 土器時間と住居時間の想定対応

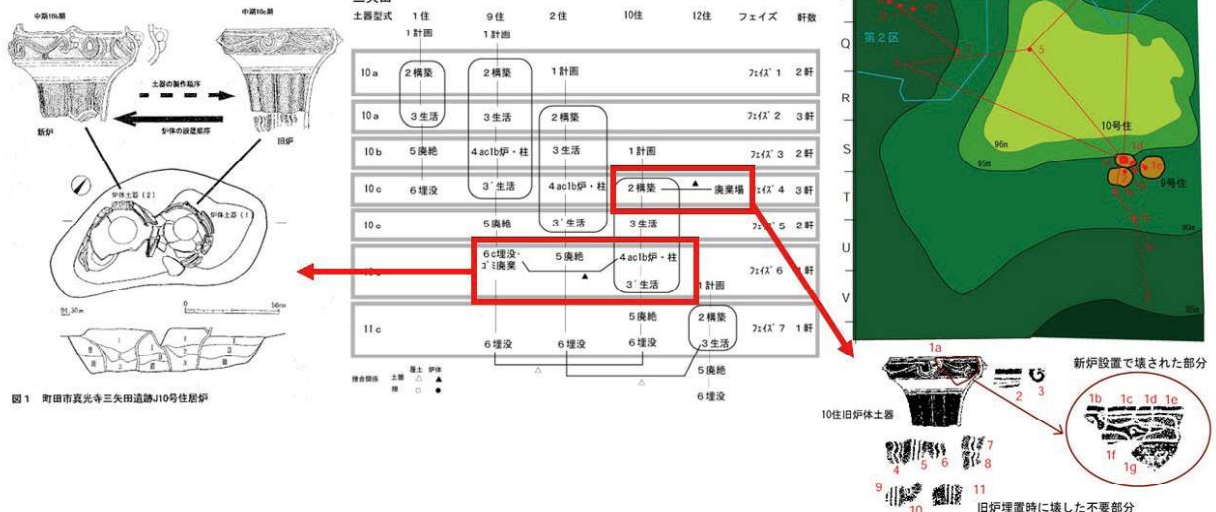
新地平(続) 180-189p 五十嵐彰論文参照

課題①～⑨の土器およびA住・B住の 時間的關係



課題 来週提出 A住・B住・土器①～⑨のそれぞれのD(廃棄時)の順序を古い順に矢印で示し、文章で説明しなさい。次ぎに、同じくM(製作時)の順番も古い順に矢印で示し、文章で説明しなさい。不確定な場合は幅を持って記しなさい(「①Dと②Dは順序不明」など)。

町田市三矢田遺跡 (加曽利E1式期の小規模集落)



土器型式の変化

制作時・使用時・廃棄時

型式学的変異・組成比(セリエーション)・廃棄単位(住居跡覆土上層下部一括達存現象)

地域・集落・製作単位・個人による温度差(推移の受容度)ー土器製作者の位置

土器製作者の性的分業 男性・女性・両者

世代間継承 母系制か父系制か、混在型か

土器作りが女性ー母方居住(世代間継承がスムーズ)、女性ー父方居住(世代間継承が断続・折衷)

認知的変異

土器製作者(縄紋人)における新旧

型式設定者(考古学者)における新旧

器種(用途:精製・粗製・特殊用途、法量)

器形

文様要素(施文工具と施文手法)

文様帯構成

文様モチーフ

割付け(均等割り付けから成り行き施文)